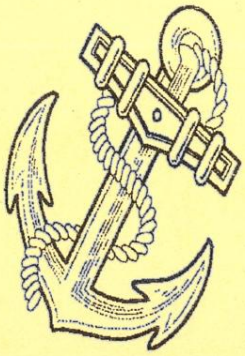


Anchor アンカー

No. 25

西暦2000年を迎えるにあたって

クリスマスに思う

確かな天声―預言の霊

真理の宝石

西暦2000年を迎えるにあたって

西暦2000年という年は セブンスデー・アドベンチスト にとって重要であろうか

—金城 重博—

西暦２０００年にあと数週間を数えるのみとなった。確かにかつてないさまざまな思いに満たされる。第三千年期に向けて人々の関心、期待はいろいろあるだろう。少数ながら、再臨運動とは異なる世の終末を警告する人々もいる。恐怖感の故に救いを求めてさまざまな宗教に飛び込む人々もいる。

アメリカの日系SDAの方から、私（筆者）が西暦２０００年をどう考えるかを聞かせて欲しいとの問い合わせがあった。記事にしたいというのである。あまり忙しくて自分の意見を書いて送ることはできなかった。ここで簡単に今考えていることを述べたい。

我々は、決して、決してキリストの再臨が西暦２０００年にあるとか、来年、日曜休業令があるとか、日時を定めるビジネスにたずさわっているのではない。来年から数年のうちに日曜休業令という事件が起こる可能性が十分にあるということは信じている。いったん日曜休業令が発布されると再臨は非常に近いということを知ることができる。ただし、再臨直前の「天からの声」で再臨の日時が知らされるまでは決して、誰も分からない。過去のアンカーをよく読めば曲解する余地はないはずである。

「主の来臨の日時を知っていると主張する人たちがいる。彼らは熱心に将来を描く。しかし、主は彼らにそうした立場をとらないようにと警告された。人の子がふたたびおいでになる正確な日時は神の奥義である」（希望下100）。

さて、紀元２０００年をどのように考えたらいいのだろうか。セブンスデー・アドベンチストにとって真剣に考えてみるべき事だと思う。「セブンスデー・アドベンチスト」とカタカナ横文字になっていると、その意味がピンとこないことがあるかと思う。第七日目安息日、そして再臨待望者という意味である。

西暦２０００年を迎えようとするとき、当然今までかつてなかったほど、偽安息日の強制と再臨はいつ来るのだろうと考えるのがセブンスデー・アドベンチストにとって当然のことではないだろうか。再臨運動がはじまったのは「いつキリストの再臨はあるのか」という発想からであった。それほどキリストの再臨を切実に待望していたのである。やがて安息日の真理を天の至聖所の研究によって理解したとき、再臨運動の先駆者たちは、獣とその像、そして獣の刻印を強制する時が来るということを世の人々に警告してきたのであった。

西暦２０００年という年はセブンスデー・アドベンチストにとって重要であろうか。

近年、いたるところで新しい千年期―ミレニアム運動が展開されている。

ローマ法王は、西暦２０００年を非常に重要な年として、特にこの３年間そのための準備をしてきたと言われている。「大ヨベルの年」「大聖年」とし、大祝典を計画している。彼らにとって、来年から「第三千年期」が始まるという。平和のミレニアムである。すべてのキリスト教ばかりでなく、すべての宗教が法王を頭として合同し、平和の千年期にするというのである。

ニューエイジ（新時代）運動も、西暦２０００年前後に彼らの救世主、マイトレーヤが出現し、「新世界秩序」を成就すると信じている。

プロテスタントも「福千年説」を信じて動いている。４０以上のキリスト教会の組織は２０００年までに全世界伝道完成の計画を推し進めているという。

預言の民は、２０００年を非常に重要な時と考えるはずである。なぜなら、預言者は、地上歴史約６千年と言っているからである。ホワイト刊行協会が出しているCD-ROMから調べてみると、E. G. ホワイトが4,000年、6,000年について言及していること実に７５回もある。地上の歴史は、キリストの前が4,000年、キリストの後2,000年は誰でも知っている事実である。今年、あと数日で2,000AD、6、000AMが終わる。しかし、西暦2、000年にキリストが再臨なさり、世は終わるということではない。「その日、その時は誰も知らない、父だけが知っておられる」からである。しかし、「約」６千年ということを預言者は言っている。

ある人は、「キリストの再臨は、今晩であってもいい、５０年後、あるいは１００年後でもいい」と言う。

私は、最近、聖書の研究から、地上歴史約６千年、そして天で過ごす千年期を確かなものと信じるようになった。そして、以前は他の人に聖書研究をするとき、「千年期」に関してあまり意味を見いだせなかった。しかし、今は違う。非常に興味深い、そし

てセブンスデー・アドベンチストにとってしっかりと理解されなければならない教理だということが分かった。なぜか。サタンは、全世界に偽りの、福千年説を信じ込ませようとしているからである。福千年説は、この地上に、全世界が改心して平和な千年が実現するとして全世界ほとんどの人をその欺瞞に呑み込むのである。

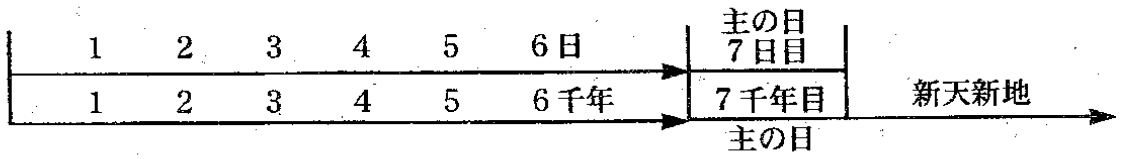
「イエスは今晩来られるかもしれない」ということはあり得ない。キリストの再臨がある前には、さばき、日曜休業令、罪の除去、後の雨、大いなる叫び、ローマの世界支配、大迫害、七つの災害、死の法令等と順序よく起こらねばならないことがあるからである。

「50年、100年後」ということはあり得ない。預言の研究でそれが分かるはずである。

再臨運動の先駆者たちは、聖書から地上歴史約６千年、そして天での千年期を信じていた。ウイリアム・ミラー、J.N.アンドリュース、S.N.ハスケル、J.N.ラフボウロー、F.M.ウイルコックス等、その他多くいたようである。彼らは驚くほど深い聖書研究者であった。J.N.アンドリュースのこの主題に関する研究の一部が、G.エドワード・リードの「Even At The Door=すぐ戸口まで」という本に紹介されている。アンドリュースは、ホワイト夫人からも高く評価された聖書研究者で（MR 5-,436)、彼の名前にちなんでアンドリュース大学ができたのである。彼は世界総理もした。スイスに伝道旅行の途中、結核で、５４才の若さで死んだ。

ある人は、E．G．ホワイトは、６千年説をおろそかにされた聖書の真理として、受け入れるように勧めなかったという。しかし、その教えは決してホワイト夫人の時代におろそかにされた真理ではなかった。たくさんの手紙を書かれた彼女は、当時そのような説を信じていた者たちの考えを矯正されたことの証拠は見つからない（リード、p135)。

先駆者たちは、第二ペテロ3:8の「一日―１千年」を創造週と対応させて７日間７千年説を、レビ記23-25,出エジプトなどから研究してうち立てたのであった。



①６日の創造週、そして７日目の安息日、すなわち<u>主の日</u>。

②６千年の地上歴史、そして７千年目の安息、すなわち<u>主の日</u>。

②の「主の日」はヨベルの年から始まり、１千年期の天での生活が終わり、この地上で新世界が始まるときに終わるのである。

とすると、聖書からも2000年は我々の思いをときめかさざるを得ない意味深い年ではないだろうか。

それに、現代の預言者、E．G．ホワイトも大争闘に地上歴史約「６千年」と７回も言及し、１千年期に９回も言及している。そしてはっきりと６千年の次は「１千年」

聖徒は天で過ごし、悪魔と悪天使は荒廃した地上に幽閉されることを言っている（大争闘下41章を参照）。

まとめてみよう:

西暦2,000年はセブンスデー・アドベンチストにとって重要な意味を持っている理由:

① ローマ・カトリック、プロテスタント、ニューエイジ運動は「福千年説」のもとに合同するという重要な意味を2,000年に与えている。

② 再臨運動の先駆者たちは、聖書から地上歴史は約６千年で終わると信じた。

③ 預言者、E．G．ホワイトもそう解している。

④ 科学者たちも地球の崩壊を指摘している。

ただし、だれも再臨の「その日、その時」は知らない。ただ非常に近づいている事を知るだけである。

我が教会の有名な聖書研究書から引用しよう:

「千年期（ミレニアム）は、地球にとっても神の民にとっても、大いなる休息の安息の日（サバス）である。なぜなら、６千年の間、地球とその住民は罪の呪いの下にうめき苦しんできた。千年期、第７千年目は、安息の休息と解放の時であろう。預言者は、土地について『こうして国はついにその安息をうけた。すなわちこれはその荒れている間、安息して』と（歴代志下36:21）言っている。

千年期は、神の時の週の最後の期間であり、地球と神の民にとって休みの大いなる安息（サバス）である。それは、福音の終結に次ぎ、そしてこの地上に神の永遠の王国を設置する事に先立つ。これが、しばしば聖書で言う「主の日」であり、それは復活と復活にはさまれている。

それは、七つの災害の注ぎ、キリストの再臨、義人の復活、聖徒の昇天、サタンが幽閉されることで始まり、それは、新エルサレムの降下、キリストと聖徒たちが天から下ってくること、サタンが解放されること、悪人の最後の復活で終わる。

千年期の間、地上は荒廃状態のままで、サタンとその使いたちが地上に監禁される。その間、聖徒たちは、最後の刑罰に先だって天で悪人のさばきにたずさわる。

その期間が終わると、死んだ悪人たちがよみがえされ、サタンが短期間解放され、サタンと悪天使、悪人の万群が聖徒たちと聖なる都を包囲する。その時、天の神のもとから火が降ってきて彼らを焼き尽くす。地上は悪人を滅ぼした同じ火によって清められ、新しくされ、聖徒たちの永遠の住まいとなる。

千年期は、『これから到来する時代』の一つである。それが終わって新天新地、新世界が始まるのである」（バイブル リーディング フォ ザ ホーム, current paper edition, p.333）。

偽りの千年期、「福千年期」運動をE．G．ホワイトは次のように預言した。それがまさに今全世界を惑わす運動として展開している。

「現在は自称キリスト者と不敬虔な人たちとの間の区別がほとんどわからない。教会員は世の人々が愛するものを愛し、すぐに彼らといっしょになるので、サタンはこの人たちを一体として結合させ、すべての人を心霊術の味方に引き入れることによって、自分の立場を強化しようと決意している。カトリック教徒は、奇跡を真の教会の一つの確証として誇っているので、不思議なことを行なうこの力に容易にだまされる。また新教徒も、真理のたてを投げ捨ててしまったので、同じように惑わされるであろう。旧教徒、新教徒、それに世俗の人たちもみな同じように、力のない形だけの敬虔を受け入れるであろう。そして彼らはこの合同の中に、全世界を改心させるための一大運動と、長く待ち望んでいた福千年期の先触れを認めるのである」大争闘下351。

この合同の中に彼らは何を見るのだろうか。

① 全世界を改心させるための一大運動と

② 長く待ち望んでいた福千年期の先触れである。

先触れ（ushering）（到来を告げる）、つまりこの合同運動の次に来るものが「福千年期」というのである。しかしそれは偽物である。「千年期」はキリストの再臨で、平和どころか、世界の滅亡をもたらし、聖徒たちは地上でなく天に挙げられるのである。

「悩みの時が我々に迫っていた。我々の民が大いなる苦悩の内にあり、泣いて祈り、神の確かな約束を懇願している一方で、悪人どもが我々を取り囲み、我々を嘲り、我々をやっつけると脅しているのを私は見た。彼らは我々の弱々しさを嘲笑し、我々の数が少ないことを嘲り、深く傷つけるような言葉で口汚くののしった。彼らは、我々が世の人々から孤立していることを責めた。我々が売り買いできなくなるように我々の物資供給源を絶ち、我々の哀れな貧困と、打ちひしがれた状態を引き合いに出した。世の支持なくして我々がどうやって生きることができるのか、彼らには理解できなかった。我々は世に依存しているのだから、世の習慣や風習や法律を認めなければならず、さもなければそこから出なければならない。もし我々だけが主の恩恵を受けた民であったとしたならば、外面的な状況はとてもそうとは思えないものであった。

自分たちが真理を持ち、自分たちの内に奇跡があり、天からの御使いが自分たちと語って自分たちと歩み、大いなる力としるしと不思議が自分たちの内に行われ、そしてこれこそ自分たちが長い間待望していた現世の千年期［福千年期］であると、彼らは宣言した。全世界が改宗し、日曜遵守令［休業令］に協調しているのに、この小さなか弱い連中は地の法律と神の律法に挑戦して立ち、地上で自分たちだけが正しいものであると主張している。

彼らは、「天からの御使いが我々に語った」と言明した：「あなたがたは、天の使者のメッセージを担いなさい」と言われたのだと。そして、サタンが死去した人たちを装い、天国に行ってきたと主張するその者たちを引き合いに出した。悲しんでいる人たちを彼らは冷笑してあざけり、馬鹿にして口汚くののしった。もっと沢

山見せられたが、すべてを記す時間はない」（マラナタ209）。

上述の文章は、平和の千年期と日曜休業令が関係していることを述べている。この福千年説運動を見ると、日曜休業令が非常に近いということを知るであろう。

「キリストはことばをつづけて、来臨されるときの世の状態を指摘される。『人の子の現れるのもちょうどノアの時のようであろう。すなわち、洪水の出る前、ノアが箱舟にはいる日まで、人々は食い、のみ、めとり、とつぎなどしていた。そして洪水が襲ってきて、いっさいのものをさらって行くまで、彼らは気がつかなかった。人の子の現れるのも、そのようであろう」（マタイ24:37-39）。キリストはここに、この世の千年期、すなわち、すべての人が永遠のために備えをする千年間についての考え方を示してはおられない。人の子がふたたびおいでになる日は、ノアの日と同じようであろうと、主は言っておられる」（希望下100）。

「神は、洪水が来る前に、ノアをつかわして世界に警告を発し、人々を悔い改めさせて、切迫している破滅から彼らをのがれさせようとされた。キリスト再臨の時が近づくにつれて、主はしもべたちを世界につかわして警告を発し、その大事件の準備をするように促される。群衆は、神の律法に逆らった生活をしてきた。そこで神は、彼らをあわれんで、清い戒めに従うように呼びかけられる。神に対して悔い改め、キリストを信じて、罪を捨てる者はみな許しが与えられる。しかし、罪を捨てることは、大きすぎる犠牲だと感じる者が多い。彼らは自分たちの生活が、神の道徳的統治のきよい原則と調和していないために、神の警告を退け、神の律法の権威をいなむのである。

洪水前の地上のおびただしい人口のなかから、わずか八人だけが、ノアによって与えられた神の言葉に従った。義の説教者は、１２０年の間、来たるべき破滅について世界に警告を発したが、彼の使命は拒否され、軽べつされた。今日も同様である。律法を賦与されたかたが、不従順な者を罰するために来られるに先だち、罪人らに、悔い改めて再び忠誠をつくすように警告されるが、大多数の者にとって、こうした警告は無益なものであろう。

使徒ペテロは言った。「終わりの時にあざける者たちが、あざけりながら出てきて、自分の欲情のままに生活し、『主の再臨の約束はどうなったのか。先祖たちが眠りについてから、すべてのものは天地創造の初めからそのままであって、変ってはいない』と言うであろう」（ペテロ第二3:3,4）。これと全く同じ言葉が公然と不信心者ばかりでなくて、この国の説教壇に立つ多くの牧師たちの口から聞かれないであろうか。「何も驚くことはない。キリスト再臨に先だって、全世界は悔い改める。そして、義は、千年の間支配する。平和だ。平和だ。万物は、世の初めから同じように続く。だれも、こうした警世家の扇動的な言葉に動かされてはならない」と彼らは叫ぶ。しかし、この福千年期の教理は、キリストや使徒たちの教えと一致していない。キリストは、重大な問いを発しておられる。「人の子が来るとき、地上に信仰が見られるであろうか」（ルカ18:8）。すでに述べた通り、世界の状態は、ノアの時代のようであると主は言われた。終末が近づくにつれて、罪悪が増すこと

を予期すべきであるとパウロは警告している。「しかし御霊は明らかに告げて言う。後の時になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに気をとられて、信仰から離れ去るであろう」（テモテ第一4:1）。使徒は、「終りの時には、苦難の時代が来る」と言っている（テモテ第二・3:1）。そして、彼は、信仰を持っているふりをする人々の間にある驚くべき罪の数々をあげている」（あけぼの上 102,103）。

まもなく、ほんとにまもなく、罪と悪魔から全く解放され、この地上であざけりと迫害の的になっていた我々は、この地上の苦しかった巡礼を終えて天に引き上げられ、愛する者たちと、主イエスにまみえるのである。

イギリスの独房で、すばらしい幻を与えられた囚人がいた。あの有名な「天路歴程」を書いたジョン・バンヤンであった。彼はその本の最後をこう閉じている:

「今やわたしは夢の中でこのふたりが門から入るのを見たが、どうだろう、はいる時、彼らの様はかわり黄金のように輝く衣を着せられた。彼らは、またそれを弾いて賛美をするための竪琴を与えられ、名誉のしるしに冠を与えられた。それから都のすべての鐘が再び喜びに鳴りびびき、彼らは『汝らわれらの主の喜びに入れ』という言葉をもって挨拶された。

さて、ちょうど門が開いてこの人々を入れる時、わたしはあとからのぞきこんだ。都は太陽のように輝き、通りもまた黄金がしいてあった。そしてその通りを頭には冠を、手にはしゅろの枝と王を讃えるための金の琴をもって歩いている多くの人がいた。

その所にまた翼を持つものが幾人かいたが、彼らはひっきりなしに「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな主！」と互いに歌いかわした。そしてそれを見た時、わたしもその仲間入りがしたいと願った」。

この地球のサンセットが刻一刻と近づいている。もうすぐ永遠の安息に入る。今与えられている時間は尊い最後の備え日なのである。世の人々はクリスマス、大みそかを賑やかに祝うかもしれないが、神の民は静かに厳粛にこの年末年始を迎えたいものである。

～クリスマスに思う～

砂川　満

今年も年の瀬がやってきた。１２月に入ると、街はどこもクリスマス一色である。キリスト教後進国であるはずの日本でも、ほとんどの人がこのキリストの誕生日にかこつけて、各々思いのままにクリスマスを祝い、楽しもうとする。商売人たちはここぞとばかりに、クリスマス商戦に明け暮れる。本家本元のキリスト教会でも、やはりほとんど例外なく、何らかのプログラムが催される。クリスマス・バンケット、クリスマス・ページェント、クリスマス・コンサート、クリスマス・キャロル、子供クリスマス会、……。私自身、長年教会で催される数々のクリスマス・プログラムに関わってきたが、今年は静かな山荘に引っ越したせいもあって、そういった企画には一切関わっていない。多少寂しい気もするが、例年のように忙殺されないことを幸いと考え、心を落ち着けて、今から約二千年前のユダヤ地方に思いを馳せてみることにした。

ここではマタイ、ルカによる福音書のキリストご降誕の記述を比較し、両者を時間的順序においても正確にまとめ、数々の貴重な示唆を与えている「各時代の希望」を参考に、赤ん坊イエスに出会い、彼を救い主キリストと認めたごく少数の人たちについて考察し、教訓を得てみたい。何よりもまず、マタイによる福音書の１、２章とルカによる福音書の１、２章、各時代の希望の１から６章を個人的に読むことを強くお勧めする。

羊飼い

イエスがベツレヘムでお生まれになった晩、その大事件を天使によって知らされ、馬小屋に駆けつけてイエスを拝む特権にあずかった人たちがいた。彼らは名もない羊飼いであった。彼らが野宿をしながら家畜の番をしていると、突然一人の天使が現れて彼らに告げた：「……見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに与える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生まれになった。……」と。それから彼らは、おびただしい数の天使たちが、「いと高きところでは、神に栄光があるように。地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」と歌うのを聞いた。私にしてみれば、天使たちの歌声を聞いたというだけでも羨ましいかぎりなのだが、この羊飼いたちは、イエスにお会いすることができたのであった。彼らは単に

幸運だったのであろうか。実はそうではなかった。彼らと他のユダヤ人との間には、決定的な違いがあったのである。

「天の使者たちは、神が聖なる真理の光を世に伝えるために召された民の無関心を驚いて見た。ユダヤ国民はキリストがアブラハムの後裔としてダビデの家系からお生まれになることの証人としてとっておかれたのであった。それなのに彼らはキリストの来臨が間近に迫っていることを知らなかった。……祭司たちも国民の教師たちも、各時代を通じて最大の事件がまさに起ころうとしていることを知らなかった。彼らは、無意味な祈りをとなえ、人々にみせるために礼拝の儀式をとり行っていたが、富と世俗的なほまれを求めることにばかりあくせくとしていて、メシヤの出現に対する準備ができていなかった。同じような無関心がイスラエルの国中にみなぎっていた。俗事に没頭している利己的な心は、全天を感動させているよろこびを感ずることができなかった。ほんのわずかな人たちだけが目に見えないおかたにお目にかかるのを待ちこがれていた。この人たちのもとへ天の使者が送られた」(希望上31ページ)。

天使たちは、救い主到来のニュースをユダヤ全国に告げ知らせたいと熱望していた。にもかかわらず、ほとんどの神の民がユダヤ史上、否人類史上最大の事件に無関心であったので、驚き呆れたようである。私たちはどうだろうか。キリストの再臨を待ち望む民と称してはいるが、キリストにお会いすることを心の奥底からの望みとし、真の意味でアドベンチストらしい生き方をしているか否か、神は御存知である。富と世俗的なほまれを求めることにばかりあくせくとしているのなら、主の再臨に備えることはいつまでたってもできない。宇宙史上最大の事件がいよいよ間近に迫っている今日、全天はセブンスデー・アドベンチスト教会に最大の関心を寄せて注目している。それなのに私たちの間には、無関心がみなぎっていないだろうか。

「ベツレヘムの丘の上空には無数の天使の群れが集っている。彼らはよろこびのおとずれを世に宣伝してもよいとの合図を待っている。もしイスラエルの指導者たちが義務に忠実だったら、イエスの誕生を布告するよろこびにあずかることができたのである。しかしいま彼らは無視される」(希望上32ページ)。

一方羊飼いたちは、救い主にお目にかかるのを心から待ち焦がれており、野宿しながらメシヤについて語り合っていた。「この人たちのもとへ天の使者が送られた」とある。

「光を求めている者に、そしてそれをよろこんで受け入れる者に、神のみ座からの輝かしい光が照りかがやくのである」(希望上32ページ)。

シメオンとアンナ

キリストがお生まれになって四十日ほどたってから、「両親は幼な子を連れてエルサレムへ上った」(ルカ2:22)。

「律法によれば、母親の献げ物としては燔祭のために一才の小羊、罪祭のために若い家ばとまたは山ばとをささげるように要求されていた。しかしもし両親が貧しくて小羊をささげることができなければ、一つがいの山ばともしくは二羽の若い家ばとを、一羽は燔祭のために、一羽は罪祭のためにささげても受け入れられることが律法に定められていた」(希望上37ページ)。

エルサレムの宮には来る日も来る日も人々が押しかけていた。律法に従って、赤ん坊を腕に抱いてささげものを捧げに来る両親も大勢いた。ヨセフとマリヤは貧しかったので彼らの身なりは粗末で、ささげものも小羊ではなかったのかもしれない。幼子イエスも、特別人目につく光彩を放っておられたわけではなかった。神性を覆い隠された救い主が、形式主義に陥り、自分たちの務めを飯のたねとしか考えていなかった祭司たちの目に留まるはずもなかった。しかしそのような雑踏の中、赤ん坊の内に輝く神性を認めた人がいた。「霊的な事物は霊的に見わけられる」のである。「そのとき、エルサレムにシメオンという名の人がいた。この人は正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。また聖霊が彼に宿っていた。そして主のつかわす救い主に会うまでは死ぬことはないと、聖霊の示しを受けていた」(ルカ2:25,26)。

シメオンは年老いていたが、救い主の来臨を心から待ち望んでいた。余命幾ばくもない身にもかかわらず、自分は生きて主にお会いすることができると確信していた。彼の望みは他に何もなかったので、彼の内にある望みと確信は彼の言動に絶えず現れていたに違いない。彼が口を開けば、間もなくおいでになるメシヤのことばかり話していたのだろう。けれども、無関心な周囲の人々の反応は、案外冷やかであったのかもしれない。あるクリスマス劇で、次のような会話を聞いたことがある。

若い男：シメオンじいさん、俺はじいさんがイスラエルの慰めについて長老たちと話しているのを耳にしたことがあるんだけど……

シメオン：それはメシヤの事じゃ。

若い男：じいさんはそのメシヤが間もなく来ると信じているようだね？

シメオン：その通り。しかもワシが考えていたよりもすぐに。

若い男：それじゃあ、じいさんはあの噂を信じてるんだね？

シメオン：あの噂？

若い男：ベツレヘムの羊飼いたちがメシヤに会ったという噂で、しかもそのメシヤは赤ん坊だったっていう……じいさんはそれを信じているのかい？

シメオン：ワシの信じているのはこうじゃ……自分はメシヤにお会いするということ。

若い男：メシヤがやって来るなんてどうして信じることができるんだい？……しかも自分が生きている間に。メシヤの到来はずっと昔から言われてきたことなのに、今の時代の俺たちがメシヤに会えるなんて、ちょっと信じられないよ。

シメオン：ワシは自分がメシヤにお会いするだろうと言っただけじゃ。

若い男：俺だって目はついているんだから、メシヤが現れれば見逃すはずはないさ。

シメオン：そうかもしれん。

若い男：それはどういう意味だい。メシヤが現れてもじいさんだけがそれを見て、俺が見逃すことがあるとでも言うのかい？

シメオン：多くの目が見ても、多くの人が理解するわけではない。

こう言われた若い男は軽蔑するように立ち去り、通りすがりの知り合いに、「どうやら、シメオンじいさんはボケてしまったようだ」と囁く。

周囲の人々から笑われ、おまけに老体は日に日に衰え、視力が弱くなっていっても、シメオンの希望と確信は衰えることなく、メシヤへの思いは日に日に強まっていった。そんなある日、シメオンはエルサレムの宮を訪れた。

「シメオンが宮にはいってくると、彼は

そこに長子を祭司の前にさし出している家族を見る。彼らの身なりは貧しさを物語っている。だがシメオンは聖霊のお告げがわかる。彼は神にささげられている幼子が、イスラエルの慰め主、長い間待ちこがれていたおかたであるとの印象を強く受ける。驚いた祭司の目には、シメオンが狂喜した人間のように見える。子供はマリヤの手にかえされていたが、彼はそれを自分の腕に受けとって神にささげる。すると彼の心にかつて経験したことのない歓喜がわき起こる。彼は幼子の救い主を天の方へ高く持ちあげて、『主よ、いまこそ、あなたはみ言葉のとおりにこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしの目が今あなたの救を見たのですから。この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光であります』と言う」（希望上42,43ページ）。

シメオンの証に、女預言者アンナも加わった。アンナは八十四歳であった。こうして、信心深い二人の老人たちの念願はかなえられた。彼らは更なる希望に満たされつつ、この世に別れを告げたことだろう。二人とも高齢であったが、単なる短い余生の慰めにメシヤを待ち望んでいたわけではなかった。

「こうした謙虚な礼拝者たちが預言を研究していたことはむだではなかった。だがイスラエルの役人や祭司として地位を占めていた人たちは、同じように預言のとうといことばを目の前にしながら、主の道に歩まず、その目はいのちの光であられるキリストを見るために開かれていなかった」（希望上43ページ）。

これら二人の謙虚な礼拝者たちと聖職者や役人たち――今日の私たちはどちらの模範に従っているだろうか。

東の博士たち

メシヤの誕生についてユダヤ人が余りにも無関心であったので、神は敢えて異邦人を用いて、選民の目を覚まさせようとなさった。東の博士たちは哲学者で、星にも精通していた。彼らの博識はよほどのものであったに違いないが、彼らは品性においても高潔な人たちであった。彼らは更なる真理の光を求めてヘブライ語の聖書を研究し、旧約の預言から、「キリストの来臨が近いことと、全世界が神の栄光についての知識で満たされることを知ってよろこんだ」（希望上49ページ）。

博士たちが天に神秘的な光を発見したのは、キリストがお生まれになったその晩のことであった。光の後に輝く星が現れた。「この星は遠くに輝く一群の天使たちだった」（希望上49ページ）。預言の研究と夢による聖霊の促しから確信を得た彼らは、信仰によって、救い主を探す旅に出た。

「星を目当てに行くには夜間に旅をしなければならなかった。だが旅人たちは、さがし求めているおかたについての言い伝えや預言のことばをくりかえして時間をまぎらした。休息のために立ちどまるたびに、彼らは預言を調べた。すると、自分たちは神にみちびかれているのだという確信が強くなった。彼らの前には外面的なしるしとして星があったが、同時にまた聖霊による内面的な証拠があたえられ、それが彼らの心に語り、望みを起させるのだった」（希望上50ページ）。

博士たちを導いてきた星はエルサレムの宮の上で止まり、そして消えた。彼らの胸は高鳴ったに違いない。「やっと救い主にお会いできる。贈り物を携えての長旅も無駄ではなかった」と考えたことだろう。真

っ先に宮へ行ったが、「驚いたことに、生れたばかりの王について知っているらしい者はひとりもいない。彼らにたずねられて人々の顔にはよろこびの色が浮かないで、むしろ驚きと恐れがみられ、軽蔑さえまじっていないとはいえない」（希望上50ページ）。

博士たちが都で出会ったのは、期待していたメシヤではなく、人々の無関心であった。しかし尚も彼らが熱心に尋ねて回るので、彼らの熱心さは人々を目覚めさせ、騒ぎは都中に広まった。「ヘロデ王はこのことをきいて不安を感じた。エルサレムの人々もみな、同様であった。そこで王は祭司長たちと律法学者たちとを全部集めて、キリストはどこに生れるのかと、彼らに問いただした」（マタイ2：3,4）。

ヘロデ王は、祭司たちと博士たちが結託して自分を引きおろそうとしているのではないかという猜疑心にかられた。一方、祭司たちの誇りは傷つけられていた。

「エルサレムの祭司たちと長老たちは、知らないふりをしていたが、しかし実際にキリストの生誕について知っていなかったのではなかった。天使たちが羊飼たちのところへやってきたというううわさはエルサレムに伝わっていたが、ラビたちはそれを注目に値しないものとみなしていた。ラビたち自身がイエスをさがし出して、博士たちをその誕生の場所に案内するのならまだしも、そうではなくて、博士たちがメシヤの誕生について彼らの注意をよび起すためにやってきたのである。……そこで、高慢とねたみのために、光に対してとびらがとざされた。羊飼たちと博士たちによって伝えられたうわさがもし信用されたら、祭司たちとラビたちの立場ははなはだおもしろくないものになり、自分たちが神の真理の解説者であるという彼らの主張はくつがえされることになる。この学識のある教師たちは、自分たちが異教徒と呼んでいる人々の前に身を低くして教えを受けようとはしなかった。神が自分たちをみすごして、無知な羊飼たちや割礼を受けていない異邦人たちにお知らせになるはずがないと、彼らは言った。彼らはヘロデ王やエルサレムじゅうをわきたたせているうわさに軽蔑を示そうと決心した。彼らはそうしたことがほんとうかどうかを確かめるためにベツレヘムに行ってみようとさえしなかった。そしてイエスについての関心を狂信的な騒ぎだと人々に考えさせた。祭司たちとラビたちからキリストが捨てられることはここにはじまった。ここから彼らの高慢と頑迷さとが、救い主に対するかわらない憎しみへと発展していった。神が異邦人に門戸をお開きになっているのに、ユダヤ人の指導者たちは彼ら自身の門戸をとざしていた」（希望上53,54ページ）。

博士たちは、自己の損得勘定でしか物事を量れない宗教指導者たちの冷淡さに驚き、民衆の無関心と無知に呆れたことだろう。彼らはがっかりしてエルサレムを後にしたが、信仰がくじかれたわけではなかった。その後、ようやくベツレヘムでイエスに出会った彼らの喜びはどれほど大きかったことだろう。その場面を想像するたびに、新たな感動と勇気が与えられる。彼らは神から与えられた役目を果たし、彼らの信仰は報われた。

適用

羊飼い、老人、異邦人――彼らだけに天からの啓示が与えられ、彼らだけが救い主にお目にかかる特権にあずかった理由は何であったのか。三者とも、どちらかと言えば当時の教会において人々の軽蔑を受ける対象であったが、彼らは救い主にお目にか

かることを心から待望し、そのために祈り、それを最高の関心事として生きていた。更に、預言を注意深く熱心に研究することによって、彼らの信仰は強められていった。それだから彼らは、神からの新しい啓示、新しい光を受けたとき、すぐに従っていき、大いなる特権にあずかることができたのである。私たちの教会は、そして私たち個人個人はどうだろうか。セブンスデー・アドベンチスト教会には、生きて主を迎える人々を備え、最後の使命を完成させる任務が負わされている。完成すべきその使命とは何であるのか、主を迎えるにはどのような生き方をし、主を迎える神の民はどのような状態に到達しなければならないのか。キリストご降誕にまつわる歴史から、現代に当てはまる教訓をいくらでも引き出すことができる。キリストにお会いできた人々、その大いなる祝福を受けそこなった人々の模範から現代の私たち、私たちの教会が学ぶべきことは数え切れないほどある。どちらの模範に従っていくか、決断するのは今である。

最後に一つだけ考察を残してから、この記事を閉じたいと思う。二千年前にイエス・キリストが私たちと同じ人間としてお生まれになり、十字架にかかられた目的は何であったのか。六千年前に人間が造られたのも、間もなくキリストが再臨なさるのも、そして現在救い主が至聖所で執り成しの働きをしておられるのも、同じ目的のためである。

「……その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」（マタイ1：21）。

その目的とは、罪の問題を解決するためであった。そして私たち人類を「そのもろもろの罪から救う」ことこそが、罪の問題解決につながることであった。その事を正しく認識していなければ、私たちは当時のユダヤ人と同じ誤りに陥ってしまい、私たちの教会に与えられた使命を果たすことができなくなるのである。

「ユダヤ人はメシヤの来臨を望んでいながら、メシヤの使命について正しい観念を持っていなかった。彼らは罪からのあがないを求めずに、ローマ人から救われることを望んでいた。……」（希望上18ページ）。

「イエス様は私たちをこのままの状態で救って下さる」という欺瞞的教えが私たちの教会にはびこっている。イエスは私たちをこのままの状態で受け入れて下さるが、決してこのままの状態で救われるのではない。私たちは罪の内に救われるのではなく、「そのもろもろの罪から救」われるのである。イエス・キリストはそのために地上に来られ、十字架にかかられ、現在も執り成しの働きをなさり、やがておいでになるのである。信仰の同胞がユダヤ人と同じ誤りに陥ることなく、イエスの贖いについての正しい観念を持ち、同じ希望を抱いて、永遠に輝きわたる星に向かって前進し続けることを祈ってやまない。

イエスはわたしたちをこのままの状態で受け入れて下さるが、決してこのままの状態で救われるのではない。わたしたちは罪の内に救われるのではなく、「そのもろもろの罪から救」われるのである。

クリスマスについての証の書の引用文

「恐れるな。見よ、すべての民に与えられる大きな喜びを、あなたがたに伝える。きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生まれになった。このかたこそ主なるキリストである」(ルカ2:10,11)。

「東から西へ、北から南へと世界中至る所で、『クリスマスがやってくる』との声が聞かれる。青少年や壮年の人々、また老年の人たちにとっても、それは一般的に喜ばしい時季である。しかし、これほどの関心を向けられるべきクリスマスとは何なのであろうか。幾世紀にもわたり、この日はもてはやされてきた。不信の世界にも、キリスト教世界によっても一般的に、キリストがお生まれになった日として受け入れられている。世が全般的にその日を祝うとき、キリストに敬意を表さない。彼らはキリストを救い主として認めること、キリストの奉仕に喜んで従うことによって彼に誉を帰すことを拒む。彼らはその日に好意を示すが、その日が祝われているところのお方、すなわちイエス・キリストに好意を示さない。

１２月２５日はイエス・キリストの誕生日と考えられており、その日を祝うことが慣例となり、多くの人に親しまれている。ところが、救い主の本当の誕生日を祝っているのだという確実性はない。この事について、歴史は何の確証も与えていない。聖書も正確な時日を示していない。神が我々の救いのために、この事が重要な知識であるとお考えになったのであれば、神は預言者や使徒たちを通して語られ、我々はこの問題に関してすべてを知ることができたであろう。しかし聖書がこの点に関して沈黙していることは、最も賢明な意図によって我々に隠されているという証拠である。……」(RH1884年12月9日)。

「１２月の第２５日を守るべき神聖な義務はない。無限の犠牲を通して人のためになされた救いに関するどのようなものでも、その公然の目的から嘆かわしいほどに歪められるのは、神にとって喜ばしい事ではない。キリストが至高の対象であるべきなのだが、クリスマスが祝われるときに、栄光はキリストからそらされ、死すべき人間に向けられている。その人間の罪深く欠陥だらけの品性が、我々の世界に来ることを彼に迫ったのに。天の至高者、天の王であられるイエスが、ご自分の王位を放棄し、栄光の御座とその支配権を捨てて、道徳的力が弱められ、罪により堕落した人類に神の助けをもたらすため、我々の世界においでになったのであった。堕落した人間を持ち上げるため、人類の悲哀と苦悩の深みに達するようにと、イエスはご自分の神性に人性を着られた。自ら人間の性質を負うことによって彼は人類を引き上げ、その道徳的価値が神のはかりにおいて嘉せられるようになさった。これらの大いなるテーマは、有限の頭脳がほとんど理解できないほど、余りにも高くて深く、余りにも無限である。

親たちはこれらの事柄を子供たちの前に保ち、神に対する彼らの義務について、彼らを『教訓に教訓、規則に規則』という具合に教育しなさい。その義務とは、贈り物や捧げ物によってお互いに栄誉を与え合うためのものではない。イエスが世界の贖い主であり、考慮と勤勉な努力の対象であり、イエスの働きが彼らの注意を引きつける壮大なテーマあり、イエスに贈り物と捧げ物を持って来るべきであることを、彼らは教えられるべきである。博士たちや羊飼いたちは、このようにしたのであった。

キリストの誕生を記念するため１２月２５日が祝われ、教訓と模範によって子供たちが、これはまさしく喜びの日であること

を教えられてきているときに、それに何らかの注意を払うことなくこの時期を過ごすのは難しいと感じることだろう。それを、非常に良い目的を果たすための日とすることができる。若者たちを非常に注意深く扱うべきである。彼らは、虚栄と快楽の追求、彼らの霊性にとって有害となる娯楽の内に自らの楽しみを見つけるよう、クリスマスに放任されるべきではない。子供たちの心と捧げ物を、神とその働き、そして魂の救いに向けることによって、親たちはこの事を左右することができる。押し殺され独断的に押さえつけられるのではなく、娯楽を欲する思いは、親たちの側の勤勉な努力によって抑制され指導されるべきである。贈り物をしたいという彼らの希望は、純粋で神聖な経路に向けられ、キリストが成し遂げるために来られた大事業の公庫に充てることによって、我々の同胞に善を成す結果をもたらすことができる。克己と自己犠牲が、キリストの行為の特徴であった。イエスを愛すると公言する我々の行為にも、そのような特徴を帯びさせよう。なぜなら永遠の生命という我々の希望の中心は、キリストにあるからである」(RH1884年12月9日)。

「すべての人が、お互いに適切な贈り物をし合うにはどうすればよいか懸命に思案している。家族の中では、次は何をあげればいいのかが研究課題となっている。毎年何かをプレゼントしてきた。今年は子供たちに、あるいはお父さんやお母さんに何をあげたらいいだろう？と。しかし、救い主に属する貧しい人たちはどこにいるのだろう。彼らはあなたの家のすぐ門口にいるのである。

救い主は、彼の左にいる人々に、『あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせず、かわいていたときに飲ませず、旅人であったときに宿を貸さず、裸であったときに着せず、また病気のときや、獄にいたときに、わたしを尋ねてくれなかった』と言われるであろう。すると彼らが、『主よ、いつ、あなたが空腹であり、かわいておられ、旅人であり、裸であり、病気であり、獄におられたのを見て、わたしたちはお世話をしませんでしたか』と答えて言うと、救い主はそれに答えて、『あなたがたによく言っておく。これらの最も小さい者のひとりにしなかったのは、すなわち、わたしにしなかったのである』と言われるであろう(マタイ25：42－45)。

さて、何故このようになるのか。それは、余りにも多くの利己心が存在するからである。イエス･キリストはご自分の苦しんでいる貧しい者たちを、ご自身と同一視なさった。そして我々が慈善を行うとき、キリストに対してそれを行っているのである。我々の内に、この種の働きをしている人がどれくらいいるのか、私は知りたいと思う。クリスマスを正しく祝う人は何人いるだろうか。金持ちは彼らの友人たちに贈り物を持ってくるが、彼らは金持ちのままである。ならば、これがどうして彼らにとって犠牲となり得るだろうか。神を喜ばせるために、我々は何をすればよいのだろうか。私があなたに申し上げよう。この日をあなたがすべきように祝おうと思うのなら、貧しい人々を訪ね、彼らに何か不足しているものがあれば、その不足を満たしてやりなさい。

そしてこれを行ってから、主に捧げ物[献金]を捧げなさい。それはあなた自身の魂に、『キリストは私のために貧しくなられた。それは彼の貧しさによって、私が富める者となるためであった』という気持ちを起こさせる。イエスはご自身を捧げることによって、この無限の贈り物が我々に届くようにして下さった。あなたの捧げ物を通して他の人たちがぶどう園に出て行って、イエスが救うために死なれたところの人々を神のみもとへつれてくる働きをするように、

あなたはイエスに贈り物をすることができるのである」(21MR223)。

「財産管理人として、キリストが我々の立場にいたらなされたであろう事をしようではないか。彼はご自分の好みを満足させるために金銭を費やされることはなかった。最も小さな者から最も偉大な者に至るまで、我々は神の財産管理人である。神の財産でもって、我々は何をしているだろうか。自己の欲求を満たすために費やす代わりに、善を成し遂げるために神から与えられた財産を用いる者たちには、祝福がやってくるであろう。もうすぐクリスマスがやってくる。プレゼントを買うのに多額のお金が費やされる季節である。克己と自己犠牲を実践しようではないか。……知的にそして熱心に働き、魂を救う事業に必要なものを、自己の欲求を満足させることに費やさないようにしよう。必要としている人たちのために、現代の真理に関する本を買いなさい。タラントや聖職の働きを託されているのは、牧師たちだけではない。硬貨や紙幣を節約するために、すべての神の子は、克己によって最善を尽くすとの誓約をしている。伝道事業の特別な方面につぎ込まれるよう、あなたのお金を主の公庫に入れなさい。心を尽くし、思いを尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、我々は神に仕えるべきである。すべての能力は、有効な活動に充てられるべきである。我々のタラントは、自己を称揚するためではなく、神を喜ばせるために用いられるべきである」(RH1899年11月14日)。

他にアドベンチスト・ホームの第７７章「クリスマス」(547 - 554ページ)を参照下さい。

「わたしは、イスラエルの子らの試みとキリストの初臨直前の彼らの態度は、キリスト再臨前の神の民の経験における立場を例証することを幾度も幾度も示された」。

1SM406

確かな天声―預言の霊―

Spirit of Prophecy

「また出たか、カルト宗教」と日本国民はうんざりさせられていると思う。「法の華三法行」の福永法源代表らの詐欺容疑事件が世間を騒がせている。信者からの驚くほど多額の献金が教団に流れ込み、とうとう警視庁の捜査の手が入った。福永法源は、自分の全生活は「天声」で支配され、それによって行動していると主張する。ホテルに５０万円も払って、家族で宿泊することも自分の考えではなく、天声に従っているだけだ、自分の時間というものはない、すべて公的な生活なのだと主張する。

天からの声、あるいは天からの啓示と言いながら、これほど宗教の混乱、教派の混乱をみた時代はなかったであろう。オウム真理教のサリン事件、ライフ、スペースのミイラ遺体事件など不可思議な事件が後を絶たない。多くの人がマインドマニピュレート（操作）されたり、コントロールされたり、洗脳されている。宗教団体ほど危険なところはないのではないか。なぜか。それは指導者は神の名において事をするからである。オウム教団最高幹部の一人であった上祐氏も公判で「私たちは偉大な予言に基づいて生きている…麻原尊師はあらゆる意味で重要な導き手になる。すなわち救世主であると私は考えており、私の全てである」とのべている。人は支配したい欲望と支配されたい欲望を持っていると言われている。一体権威ある声はないのだろうか。天声というものがあまりに多くて人心を混乱させている。

天からの声というとき、神からの声と、サタンからの声と両方あることを世の多くの人は知らない。天声によって行動していると主張するときに、このどちらかに動かされているのである。

我がセブンスデー・アドベンチスト教会も「女の残りの子ら」、最後の真の教会だと主張する。それは聖書に預言されているからである。イエスの証し、すなわち預言の霊は天声の役割を果たすのか。聖書から確認してみよう。

セブンスデー・アドベンチストこそ原始キリスト教の流れを汲む、ほんとの、そして最後の教会であることの証明として次の預言を挙げる：

黙示録12:17.「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った」。

黙示録19:10.「<u>イエスのあかし</u>は、すなわち<u>預言の霊</u>である」

と聖書自体が解釈している 。

預言の霊、天の唯一のチャンネル

ペテ口第一1:10,11.「この救については、あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかしした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである」。

預言者たちに働いて、あかししたのは、キリストの霊であった。だから、預言の霊とも言うし、イエス・キリストのあかしとも言うのである。それは、イエスがご自分の教会に語るチャンネルであった。預言者や使徒たちのうちに働く聖霊によってキリストが語っていたのである。

ネヘミヤ9:30.「あなたの預言者たちにより、あなたのみたまをもって彼らを戒められました、…」。

こうして啓示されたものを書き残したのが聖書である。

ペテ口第二1:20,21.「聖書の預言はすべて、自分勝手に解釈すべきでないことを、まず第一に知るべきである。なぜなら、預言は決して人間の意志から出たものではなく、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものだからである」。

預言者たちは、「聖霊に感じ」て語った。欽定訳では「聖霊に動かされて」となっている。伝達の順序をヨハネはまとめて次のように言っている:

黙示録1:1.「イエス・キリストの黙示（啓示）。この黙示（啓示）は、神が、すぐにも起るべきことをその僕たちに示すためキリストに与え、そして、キリストが、御使をつかわして、僕ヨハネに伝えられたものである」。

神からキリストへ、キリストから天使へ、天使から預言者へ、預言者から人々（教会）へとなっている。

イエスの誕生という重要事件についてザカリヤとマリヤに知らせるためキリストに次ぐ最高位の天使が選ばれた。その名はガブリエルである。

ルカ1:11.「すると主の御使が現れて、香壇の右に立った。

1:19. 御使が答えて言った、『わたしは神のみまえに立つガブリエルであって、この喜ばしい知らせをあなたに語り伝えるために、つかわされたものである』

1:26. 六か月目に、御使ガブリエルが、神からつかわされて、ナザレというガリラヤの町の一処女のもとにきた。

1:30. すると御使が言った、『恐れるな、マリヤよ、あなたは神から恵みをいただいているのです。

1:31. 見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい』」。

旧約の預言者たちにイエスがつかわしたのも、この同じ天使であったのである。

ダニエル8:16.「わたしはウライ川の両岸の間から人の声が出て、呼ばわるのを聞いた、『ガブリエルよ、この幻をその人に悟らせよ』。
10:13. ペルシャの国の君が、２１日の間わたしの前に立ちふさがったが、天使の長のひとりであるミカエルがきて、わたしを助けたので、わたしは、彼をペルシャの国の君と共に、そこに残しておき、
10:21. しかしわたしは、まず真理の書にしるされている事を、あなたに告げよう。わたしを助けて、彼らと戦う者は、あなたがたの君ミカエルのほかにはありません」。

この「真理の書」、すなわち聖書に関わってくるのが、ミカエルとガブリエルである。ミカエルは天使の頭であり（ユダ9）、天使の頭は「主ご自身」（1テサ4:6）である。テサロニケ第一4:6には「主ご自身」と「天使の頭」は別のように読めそうだが、預言者は君、ミカエル、天使の頭としている（PP761-appendix,RC90）。このように、啓示の順序は、神からキリストへ、キリストから御使へ、御使から預言者へ、預言者から教会へということになる（黙1:1）。

黙示録22:6.「これらの言葉は信ずべきであり、まことである。預言者たちのたましいの神なる主は、すぐにも起るべきことをその僕たちに示そうとして、御使をつかわされたのである」。
22:7.「『見よ、わたしは、すぐに来る。この書の預言の言葉を守る者は、さいわいである。』
22:8. これらのことを見聞きした者は、このヨハネである。わたしが見聞きした時、それらのことを示してくれた御使の足もとにひれ伏して拝そうとすると、
22:9. 彼は言った、『そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書の言葉を守る者たちと、同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい』」。

人間社会では、天声を聞いたり、啓示を受けた者がいると人々はその人を崇め拝む傾向がある。そしてその人自身もそれを受容するのである。しかし、ヨハネに啓示を授けた、ガブリエル自身さえ拝まれることを強く拒んだのである。これが本当の天声の器、神の僕の態度である。ただ神だけを拝せよと言うのが本物である。カルト集団、今はやりの新興宗教を見られたい。高慢と贅沢がその特徴である。

第一天使は、大声で言った、「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め」（黙14:7）と。
神以外におそれ、栄光を与え、伏し拝むものがあってはならないのである。指導者、神学者、組織を権威とするときにほんとうの一致はない。偽りと権力で一致のようなものを作り上げたとしてもいずれ崩れることは歴史が証明している。真の羊飼いは、

愛と真理で一致をもたらす。

だから第二天使も叫ぶのである、「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者」（黙14:8）と。バビロンとは混乱という意味である。第一天使を拒んだ一般キリスト諸教会にあてはまる。倒れたというのは、「道徳的堕落」のことである（大争闘下92）。葡萄酒は、偽りの教義のことである。一般プロテスタント教会は様々な偽りの教義で混乱している。やがて完全に堕落するとき、「わたしの民よ、彼女から離れ去れ」（出てきなさい一欽定訳）との天声が聞かれるであろう（黙18:1-4）。

第三天使の使命は最も恐ろしい警告である。「おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」（黙14:9-12）。

最後の真の教会は、「神の戒め」と「イエスの信仰（欽定訳）」ともう一つ、イエスのあかしを持つ教会である。最後の真の教会を誰もが見つけられるように、神は明確な特徴を与えられた。

黙示録12:17.「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った」。

今日、諸教会の声はバビロン（混乱）である。神の言葉を自分たちの推測でまちまちに解釈する。この最後の混乱時代に確かな声で導かれる「残りの子ら」といわれる、教会に属するということは何という特権であろう。

最後の真の教会はイエスのあかし=預言の霊という確かな声を持っているのである。そこにはバビロン（混乱）には見られない秩序があるはずである。

コリント第一14:33.「神は無秩序の神ではなく、平和の神である」。

エゼキエルは、幻のうちに神の秩序を見せられた。

エゼキエル1:1.「第３０年４月５日に、わたしがケバル川のほとりで、捕囚の人々のうちにいた時、天が開けて、神の幻を見た」。

２節から１４節を見ると、彼は、たえず火を吹き出している激しい風を描写し、その中から四つの生きものが出てきて、その中には燃える炭の火のようなものがあり、彼らの動きは「いなずまの光のように行き来していた（欽定訳）」と描写されている。

１章に描写されていることは、どうなっているのか把握しがたいが、主の僕、E. G. ホワイトは、１５節から２８節の説明を何カ所かでしている（国と指導者下143；教育

210；7BC1161参照)。四つの生きもの、数多くの輪、生きものの霊、そして人の姿のような形をしたものが神のみ座にある。

E. G. ホワイトは次のように説明している:

「数多くの輪が互いに入り組み、四つの生きものによって動かされていた」「いかにも一見混乱しているように思われた。しかし、それらは、完全な調和を保って動いていた。ケルビムの翼の下の手によって支えられ、導かれていた天の存在者（聖者たち、教育210）がこれらの輪を推進していた」と説明している。

明らかに、天使の群を描写している。輪には目が満ちていた。すべてが霊の導きに従って動いていた。

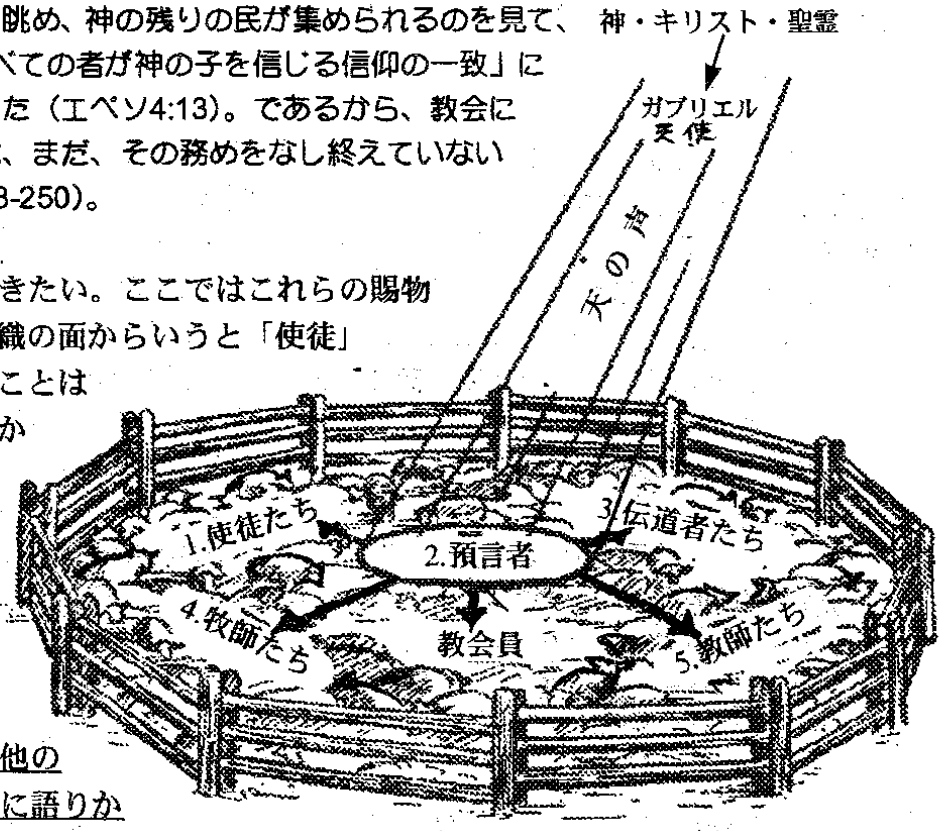
そして「一つの声がすべてを導いている」(1:25)。天上での神の働き、地上での神の働き（15,16,19）を神はすべてコントロールしておられるということである。地上での真の教会もこの一つの声に従っている限り混乱はないのである。

この教会の一致は初代教会に一時成就した。しかし、完全な成就は未来のことである。預言の霊についての分かりやすい説明が初代文集に書いてある。初代文集にあるのでE. G. ホワイトが書かれたものかと思ったが、R. F. コットレルの文である。ぜひ読んでいただきたい。

「キリストは、天に上られたときに、人々に賜物をお与えになったことが、この聖句によってわかる。その賜物のなかに、使徒、預言者、伝道者、牧師、教師などが挙げられている。これらが与えられた目的は、聖徒たちをととのえて、一致と知識に至らせるためであった。今日、牧師であり教師であると言っている人々の中には、これらの賜物は、1800年前にその目的を完全に達成したので、今はもう止んだのだと言う人がある。それではなぜ牧師や教師という称号も廃業しないのだろうか。もし、この聖句の預言者という務めが、原始教会だけに限られたものであるとすれば、伝道者やその他の務めもみなそうである。そこにはなんの区別もなされていないからである。

さて、この点について、少し考えてみたい。これらの賜物はみな、聖徒たちをととのえて、一致と彼を知る知識とに到達させるためであった。初代教会は、それらの影響のもとにあって、しばらくの間、一致を保っていた。「信じた者の群れは、心を一つにし思いを一つにして」いた。そして、このような一致の当然の結果として、「使徒たちは主イエスの復活について、非常に力強くあかしをした。そして大きなめぐみが、彼ら一同に注がれた」(使徒4:31-33)。今日、このような状態がなんと望ましいことであろう。しかし、背教が起こって、分離と暗い影が美しい教会を傷つけ、教会は荒布をまとった。分裂と混乱が起きた。キリスト教会において、今日ほど、信仰が大きく分裂した時はなかった。<u>原始教会において、一致を保つために賜物が必要であったならば、今日、その一致の回復のために、賜物がどんなに必要なことであろうか</u>。そして、神が、最後の時代に、教会の一致を回復しようとしておられることは、預言が明らかに示しているところである。見張びとは、目と目を相合わせて、主がシオンに帰られるのを見ると約束されている。また、終わりの時

に、賢い者は悟ると約束されている。これが成就するときに、神が賢い者とみなされるすべての者の中に信仰の一致が起こる。なぜなら、実際に正しく理解する者たちは、必然的に同様の理解に到達するはずだからである。
このような目的のために与えられた賜物を除外して、他にこの一致をもたらすものがどこにあろうか。
このように考えてくるときに、ここに予言されている教会の完全な状態というのは、まだ将来のことであることは明白である。従って、これらの賜物は、まだその目的を果たしていないのである。エペソ人への手紙は、紀元６４年に書かれた。それは、パウロが、わたしは今や自分を犠牲にしようとしている。わたしが世を去るべき時はきたとテモテに言う約２年前のことである。背信の種は、今や、教会の中で発芽しつつあった。なぜなら彼は十年前に、テサロニケ人への第二の手紙のなかで、「不法の秘密の力が、すでに働いている」と書いたからである。狂暴なおおかみが、はいり込んできて、容赦なく群れを荒らそうとしていた。そのとき、教会は、この聖句に言われている一致による完全に向かって進まず、党派に分かれて、分裂しようとしていた。使徒パウロは、これを知っていた。彼は大背教のかなたを眺め、神の残りの民が集められるのを見て、「わたしたちすべての者が神の子を信じる信仰の一致」に到達すると言った（エペソ4:13）。であるから、教会におかれた賜物は、まだ、その務めをなし終えていないのである」(248-250)。



絵を見ていただきたい。ここではこれらの賜物の順序がある。組織の面からいうと「使徒」が最初にきていることは確かであるが、しかし、その重要性からいうとそうではない。重要なものは、イエスの声である。この声は、本来は預言の賜物を通して他の賜物に、また教会に語りかけられるのである。この声を聞いて同じ事を語る事が神の御心なのである。初代教会の場合、ある使徒たちは、使徒の賜物だけでなく、預言の賜物も与えられていた。ヨハネも、ペテロも、パウロもそうであった。それゆえに同時に一つ以上の賜物を持つことも可能なのである。

R．F．コットレルは更に次のように説明している:

「黙示録22:9には、同じことが繰りかえされて、次のように言っている。『わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちと同じ僕仲間である』。このような比較によって、『イエスのあかしは、すなわち預言の霊である』という言葉の意義の重要性を悟るのである。しかし、イエスのあかしとは、一つの霊のすべての賜物を含んでいる。『わたしは、あなたがたがキリスト・イエスにあって与えられた神の恵みを思って、いつも神に感謝している。あなたがたはキリストにあって、すべてのことに、すなわち、すべての言葉にも知識にも恵まれ、キリストのためのあかしが、あなたがたのうちに確かなものとされ、こうして（その結果一新改訳）、あなたがたは恵みの賜物にいささかも欠けることがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現われるのを待ち望んでいる』（コリント第一1:4-7)。キリストのあかしはコリントの教会において、確かなものとされた。そして、その結果は、どうであっただろうか。彼らは、恵みの賜物にいささかも欠けることがなかった。そこで、残りの民は、イエスのあかしに確く立ち、恵みの賜物に、いささかも欠けることがなく、われわれの主イエス・キリストの現われを待ち望んでいるのであるという結論を下してもよいのではなかろうか」。

絵で見るように、このイエスのあかし=預言の霊が天からのイエスの声であり、これが使徒、伝道者、牧師、教師に受けとめられるなら、完全な一致を見るはずである。それが、エペソ4:13に書かれている信仰の一致、知識の一致である。

コリント第一1:10.「さて兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたに勧める。みな語ることを一つにして、お互の間に分争がないようにし、同じ心、同じ思いになって、堅く結び合っていてほしい」。

パウロの勧告から離れ、天声、すなわち預言の霊、イエスの証の欠如が原因となって今日のキリスト教諸教会（バビロン)の分派、分裂、紛争、混乱が生じたのではなかろうか。

バビロン、諸教派に権威の天声がない

キリスト教一致運動世界会議会長であった、ニューヨークのブレント主教は、１９２７年の夏、スイスで開かれた世界会議で次のように言った:

「キリスト教界がこれ以上セクト主義（分派）で東の諸国を感染させないようにすることは何という挑戦であろう。それは、福音の力を奪い、人々にパンの代わりに石を与えるようなものである。…

ある国では、特に国教会があるところでは、分裂は最小限にくい止められているだろうが、しかし、そのような国でも海外伝道となると、キリスト教派の分派争いに参加する。キリスト教界は世界宗教として役を果たさず矛盾している。アメリカのよう

な国では、あらゆる種類の様々な名前の教会が存在する。
どこの国においても、どこの講壇からも迫力ある声が聞かれないのだ。…
我々は道に迷ってしまった時代に住んでいる。キリスト教を救うことができるのは、イエス・キリストに要約された宗教だけである。…」
アテネの大司教、メトロポリタン・クリュソストモスは言っている。「唯一使徒から継承されたカトリック（普遍的）の教会はギリシャ正教会として知られている。…
我々は、この土台に立って（ギリシャ正教会を真の教会として）、全キリスト教会が一つになることを心から願うものである。そうするときに、ローマ教会のぜいたくと西側世界における最もローマ教会に反対する極端な説（プロテスタントのこと）を避けることができるのである。神から最初に祝福されるのは、正教会である（Literary Digest, 1928年2月18日；RH 1927年10月27日に引用、アーサー・マックスウェルの記事、J.H.N.Tindall説教集に引用）。

スイスでの世界教会一致会議の声明に対して、ローマ法王は、全世界の聖職者にあてて回勅を発表した:

「カトリック教会と他教会との間に理解の可能性は存在しない。キリストによってうち立てられた教会は一つの教会、ただ一つの教会以外にないことをクリスチャンは信じざるを得ないであろう。では我々は尋ねるが、キリスト教会の創設者の御心にかなって建てられたはずの教会がなぜ、みんな一致しないのか。…
使徒座（法王）は、いかなる汎キリスト教の会議には参加できないし、そのような試みに加盟したり援助することはできない。そうすることは、唯一の教会から広く離脱した偽りのキリスト教に権威を着せることになる。どうして教会は神から啓示された真理を妥協に引き吊り落とすような不義の試みにがまんできよう？」

この世界大会議は、世界からギリシャ正教会、聖公会、プロテスタント諸教会からの代議員たちから成っていた。法王からのこのような回勅は、宗教界を扇動した。ある者は大いに侮辱された。米国の聖公会の雑誌は次のように言った:「我々は法王が我々の理解を受け入れることができないように、我々も法王の解釈を決して受け入れることができない。プロテスタント教会も受け入れることができない。…そこで、聖霊が我々すべてを真理に導くまでは、行き詰まったままである。」…
世界会議会長のブレント主教が言ったように、この論争に決着をつける「声がない」のである。

各教派優位、「天声」を主張する

法王は、ローマ・カトリック教会が真の教会であり、他の諸教会は囲いに戻ってこなければならない、それのみが一致の基礎であると主張する。
ギリシャ正教会は、ローマ・カトリック教会、聖公会、西側のプロテスタント諸教

会は、ギリシャ正教会の指導を受け入れることに一致の基礎を見いださなければならないと主張する。

聖公会は、自分たちこそカトリックとプロテスタントの間の真の土台だと思っている。

プロテスタント諸教会は、混乱の中にあるとはいえ、一致の土台は彼らの聖書の解釈を受け入れることだと思っている。

このようにキリスト教界の一致がもたらされるのは不可能と考えられていた。

ギボン枢機卿は次のように言った:

「連合が失敗したのは、教会員は共通の土台がないからだ。権威をもって『こう主は言われる』という声がなかったのだ」と（Faith of Our Fathers,144)。

もちろん、カトリックは自分たちはその声を持っていると主張する。しかし、ギボン枢機卿は、法王は霊感を受けていないことを自認している。「法王無謬説は、彼が霊感を受けていることを意味しているのではない。使徒たちは霊感の賜物が与えられていた。カトリックの誰も法王は霊感を受けているとか、正しくはいわゆる啓示を受けているとか主張することはしない。法王は、信仰や道徳について教会に公表するとき、判断の誤りから守られるということである」（同p 149)。

ここではっきり分かることは、カトリックも、プロテスタントも、聖公会も、ギリシャ正教も彼らの決定の声は人間の知恵ということである。彼らには、神からの声―「イエスの証」が欠けているのである。

今日諸教会はサタン的「天声」で一致しようとしている

永年不一致と混乱に悩んできたキリスト諸教会は、イエスがヨハネ１７章に祈られた一致を実現しようと必死の努力をしている。しかし、「おきてと証」、十戒と預言者たちの証に従わない一致運動、エキュメニカル運動は、別の声によって動かされているのである。しかも現在、このエキュメニカル運動を先頭に立って推進しているのがローマ・カトリック教会である。ローマ・カトリック教会は、キリスト教ではなく、「反キリスト」だと言ってはばからない。「サタンの代表者」「サタンの生んだ一大傑作」である（大争闘上44)。

それは、かつてプロテスタントが声を大にして言ったことだった。

マルチン・ルターは言った:「わたしは、法王が反キリストであって、彼の座はサタン自身の座であることを知ったからである」と。

チャールズ・スポルジョンは言った:「我々は賢明な大胆さでローマの誤謬に傾いている人たちに警告しなくてはならない。我々はカトリック教の悪事について彼らに話さなければならない」と。

ジョン・ノックスは言った:「まさしく反キリストである」と。

ジョン・ウエスレーは言った:「彼は確かに罪（不法-口語訳）の人である」と。

ジョン・カルビンは言った:「我々は、ローマ法王を反キリストと呼ぶ」と。

プロテスタントはこんなにも変わった！

しかし、今日、我々がキリスト教界に見ているのは何であろうか。このプロテスタントの「譲歩と妥協」に「法王教徒自身が見て驚き、理解しかねて」いるのである（大争闘下322）。

プロテスト（抗議）でなく、合同である。一致である。「真理によって彼らを聖別してください」と祈ったイエスは、この地上でご自分の名を称える者たちが、真理を踏みにじって「主よ、主よ」と言いながら、「一致、一致！」と叫んでいるのをごらんになってどんなに悲しんでおられるであろう。ローマ・カトリックにプロテストして、真理のために殉教していった聖徒たちは、今日の一致運動の姿を見ることができたなら、どんなに悲しむことであろう。「真理と正義を曲げなければ得られない一致であるならば、彼らはむしろ不和をも、そして戦争をもいとわなかった」（大争闘上39）のである。

今やプロテスタントは、「大きな事を語る口」を持つ「小さい角」（ダニ7:8）、ローマ・法王権の声に従いつつある。

> 「旧教徒、新教徒、それに世俗の人たちも…この合同の中に、全世界を改心させるための一大運動と、長く待ち望んでいた福千年期の先触れを認めるのである」（大争闘下351）。

「大争闘」の著者E．G．ホワイトが１５０年以上も前に次のように書いた:

> 「プロテスタント教会内の大きな信仰の差異は、どんなに努力しても一致を図ることはできないということの決定的証拠であると考える人々が多い。しかし、ここ数年にわたって、プロテスタントの諸教会内において、共通の教義を土台として合同しようとする気運が強く動き出している。このような合同を達成するためには、たとい聖書的見地からどんなに重要なものであっても、すべての者が一致しない問題点は、必然的に放棄されねばならなくなる」（大争闘下164）。

１９６２年に開かれたバチカン第二公会議から、ローマ・カトリックは自分たちの主導の時期は来たと見て、エキュメニカル運動のクレッシェンド（音楽でだんだん強く大きくするという意味）に入った。しかもバチカンは紀元２０００年をターゲットにしているのである。エキュメニカルの指揮者はローマ・カトリックである。指揮者の指揮棒が「クレッシェンド！」と力強く振り回されているのが見えるだろうか。

プロテスタント、カトリック両教会の共同事業として「共同訳聖書」もできた。

「信仰による義認」の争いにも終止符を打って、ローマ・カトリック教会とルーテル教会が、今年１０月に共同宣言をした。「愛と一致」の説教がどこにも子守歌のように聞こえる。ついにプロテスト（抗議）する声はやみ、真理の戦いは終る。

アメリカの大伝道者、ロバート・シューラーはこう言っている:「今や、プロテスタ

ントは羊飼い（法王）のもとに行って、尋ねる『家に帰るには何をしなければならないのですか』と」（ロサンゼルス・ヘラルド・エグザミナー 1989年９月19日）。

天声―預言の霊を持つ唯一の教会、セブンスデー・アドベンチスト

セブンスデー・バプテストという教会があり、彼らは第七日目安息日を守るが、この預言の賜物を持っていない故に「女の残りの子ら」から除外しなければならない。すると、黙示録12:13-17節にある「女の残りの子ら」としての特性を持つ教会は一つしかない。セブンスデー・アドベンチストである。それは聖書的な二つの特徴を備えている。

1．神の戒めすべてを守る教会である。第七日目安息日も含めて。
2．イエスの証、すなわち預言の霊を持つ教会である。

預言の霊は、E．G．ホワイトに与えられたと我々は信じている。彼女が書き残したものを「証の書」「預言の霊」「イエスの証」とも言っている。しかし、最後の後の雨で聖霊が豊かに注がれるとき、完全な成就を見るのであろう。なぜなら、ヨエルの預言は、一人の人を言っているのではないからである。

パウロは再臨に備える者たちが預言の賜物をさげすまないように次のように警告している:

テサロニケ第一5:19.「御霊を消してはいけない。
5:20. 預言を軽んじてはならない。
5:21. すべてのものを識別して、良いものを守り」なさい。

初代文集から引用しよう:

「御霊を消してはいけない。預言を軽んじてはならない。すべてのものを識別して、良いものを守り」なさい（テサロニケ第一・5:19-21）。この手紙のなかで、使徒パウロは、主の再臨のことを述べている。それから、彼は、その時の不信仰な人々が、「平和だ無事だ」と言っている時に、夜の盗人のように、突如として滅びが彼らをおそってくることを描写している。そして、彼は、このようなわけであるから、目を醒まして慎んでいるように勧めている。彼の勧告のなかに、前述の「御霊を消してはいけない」などの言葉がでている。この三つの聖句を、互いに全く関係のない別々の聖句であると考える人がある。しかし、これらは、その順序に従って、自然に結び合わされている。御霊を消す人は、御霊の結ぶ当然の実である預言を軽んじる。「わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言を」する（ヨエル2:28）。

「すべてのものを識別して」という表現は、ここで扱われている預言という主題に限られているのであって、われわれは、神がみ言葉の中にお与えになった識別法によって、霊を試みなければならないのである。霊的欺瞞や偽りの預言が、現在満ちあふれている。そしてこの聖句は、この点についても特に当てはまるに違いない。

しかし、使徒パウロが、すべてのものを拒否せよ、とは言わずに、すべてのものを識別して、良いものを守れ、と言っているのに注意しよう」(R. F. コットレル) 250,258。

預言の霊は、キリストの再臨に備えをさせる！

続く聖句を見ると、預言の霊はキリストの再臨に民を備える役目を果たすことが分かる。

テサロニケ第一5:23.「どうか、平和の神ご自身が、あなたがたを全くきよめて下さるように。また、あなたがたの霊と心とからだとを完全に守って、わたしたちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのない者にして下さるように」。

コリント第一1:6-8.「キリストのためのあかしが、あなたがたのうちに確かなものとされ、こうして、あなたがたは恵みの賜物にいささかも欠けることがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れるのを待ち望んでいる。
主もまた、あなたがたを最後まで堅くささえて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、責められるところのない者にして下さるであろう」。

セブンスデー・アドベンチストの危機—預言の霊を軽視、無視？

「最後の時代の危機のさなかに光を最も必要としている神の民からこの光をさえぎることがサタンの特別な目的である」(5T667)。
「サタンの最後の欺瞞は、神のみ霊の証を無効にする事である」(1SM48)。

証の書に不信を抱くと聖書との関係はどうなるだろうか。預言者に語ってもらおう:

「神の民の証の書に対する信仰を弱めさせることが、サタンの計画である。次に我々の信仰の重要点、我々の立場を明らかにする柱（複数）に関する懐疑が続く。それから聖書に関する疑いが続き、そして破滅に下っていく」(4T11)。

ある人は、「聖書、聖書のみ」といかにも忠実なプロテスタントのように見せかけて、預言の霊—証の書を無視する。またある人は、証の書は聖書の霊感と違うと言って、預言の霊を軽視する。更に警戒しなければいけないのは、一見、E. G. ホワイトを預言者と認めながらその書き物の信憑性について疑いを投げかける人たちである。預言の霊を巧妙に否定するのが流行ってきてはいないだろうか。聖書を書かせた同じ聖霊により、旧約、新約時代の預言者たちに遣わされた天使ガブリエルがホワイト夫人に働いて書き残されたのである。質が違うであろうか。私は、証の書は霊感を受けた聖書の最高の注解書であると信じている。「預言者の霊は、預言者に服従する」(コ

リント第一14:32）と言われているように聖書と全く矛盾のない証の書が与えられていることは感謝に堪えない。

私は、読者に聖書と証の書の正しい関係を霊感の書から確信が得られるまで研究するようにお勧めしたい。「大争闘」の序論は、E. G. ホワイトによる霊感の記事なのである。それに初代文集に入っている、R. F. コットレルの記事も併せて読んでいただきたい。あとは、証の書について人の書いたものを読むために時間を費やすより、自分で各時代の大争闘シリーズやキリストへの道、その他の書物を読めば、聖霊による確信を自分で持つことができる。それは、ヨハネ９章の盲人のようにどんな脅迫にも固く立つことのできる確信である。

イエスは「わたしには、あなたがたに言うべきことがまだ多くあるが、あなたがたは今はそれに堪えられない」と言われた（ヨハネ16:12）。ある人たちは、旧約だけを使い、新約を使わない。ある人たちは、新約聖書だけ使って旧約はユダヤ人のものとしてつかわない。ある人たちは、四福音書だけを使う。ある人たちは、わけの分からないダニエル書、黙示録の預言は重要でないとする。ある人たちは聖書だけで十分だとし、預言の霊、証の書はいらないとする。

ヨハネ21:25.「イエスのなさったことは、このほかにまだ数多くある。もしいちいち書きつけるならば、世界もその書かれた文書を収めきれないであろうと思う」。

それらは重要でなかったのだろうか。否である。ただ堪えられなかったし、また、世界も文書として収めきれないほどのものだったためである。それらは重要であったので後に送る聖霊が「わたしが話しておいたことを、ことごとく思い起こさせる」（ヨハネ14:26）のであった。そればかりでなく、聖霊は「あなたがたにすべてのことを教える」のであった。

「けれども真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。それは自分から語るのではなく、その聞くところを語り、きたるべき事をあなたがたに知らせるであろう」（ヨハネ16:13）。

聖霊は「神の民が、そこに含まれている教えを必要とするに従って、代々にわたって示されるのであった」（大争闘下36）。

だから、イエスが去って後、預言の霊によって黙示録も与えられ、パウロにも天からの啓示が与えられたのである。使徒たちは手紙という形で残していった。

「大争闘」の序論から少し引用しよう:

「しかし、神がみことばを通してみこころを人間に啓示されたからといって、聖霊のたえざる臨在とみちびきが不要になったわけではない。それどころか、聖霊は、みことばを神のしもべたちに開き、その教えを解明して実行に移させるために、救

い主によって約束されたのである。しかも、聖書に霊感を与えたのは聖霊だったのであるから、聖霊の教えがみことばの教えと相反するということはあり得ないのである。」…
「聖霊は、神のみことばと調和して、新約時代にその働きをつづけるのであった。旧新約聖書が与えられつつあった時代に、聖霊は、聖書の中にあらわされるはずの啓示とは別に、個々人の心に光を与えることをやめなかった。聖書として与えられるものとは無関係な事柄において、人々が聖霊を通して警告と譴責と勧告と教えを受けたことが、聖書自体の中に述べられている。また、その語ったことばが記録されていない各時代の預言者の名もあげられている。同様に、聖書が完成されてからも、聖霊は、依然としてその働きをつづけ、神の民を照らし、警告し、慰めるのであった」。

ここに預言者がはっきりと聖書の啓示とは別に、聖書として与えられるものとは無関係な事柄において使命が与えられる事を述べている。たとえばタバコ環境汚染について聖書には書かれていないが、最後の時代の預言者、E. G. ホワイトはタバコその他健康改革に関して細々と言及しているように、終末に必要な使命がたくさん与えられたのである。

「教会史上の各時代は、その時代の神の民の必要に応じて特別な真理の展開によってそれぞれ特徴づけられている。…緊急の場合は、人々に特別な真理をお与えになる」(大争闘下379)。
「ルターの時代には、現代の真理、すなわち、その時代において特別重要な真理があった。今日の教会のためにも現代の真理がある」(大争闘上168)。
「人間は、神があわれみのうちにお与えになった警告を拒否して無事ではあり得ない」(大争闘下148)。
「そのようにいまわれわれは、キリストの再臨と世にのぞもうとしている滅亡について警告が与えられている。この警告に注意する者は救われるのである」(希望下102)。

預言の霊は、イエスが去って後、キリスト教が危険な航海に出発し、「狂暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んできて、容赦なく群れを荒し始めたとき」に著しく働いた。ましてキリスト再臨の最も危険なときに預言の霊が与えられないはずがない。なぜなら、羊飼いイエスは、「世の終わりまで、いつもあなた方と共にい」て導かれると約束なさったからである。

「神の大いなる日の光景と直接関連して、主は、預言者ヨエルによって神の霊の特別なあらわれを約束しておられる。「その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。あなたがたのむすこ、娘は預言をし、あなたがたの老人たちは夢を見、あなたがたの若者たちは幻を見る」(ヨエル2:28) この預言は、ペンテコステの日に聖霊がくだったことによって、部分的な成就をみた。しかしそれは、福音の最後の働

きに伴う神の恵みのあらわれにおいて、完全に成就するのである」（大争闘序）。

「善と悪との大争闘は、時の終わりにいたって、ますます激しさを加えるのである。すべての時代において、サタンの怒りはキリストの教会に向けられてきた。そして神は、ご自分の民がサタンの勢力に対して強く立つことができるように、恵みと霊を与えてこられた。キリストの使徒たちが、福音を世界に伝え、またそれを将来の時代のために記録しなければならなかった時、彼らは聖霊による光を持別に与えられた。しかし、教会が最後の救いに近づくにつれて、サタンはますます強い力をもって働くのである。彼は、「自分の時が短いのを知り、激しい怒りをもって」やってくるのである（黙示録12:12）。彼は、「あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議」をもって働く（テサロニケ第二・2:9）。かつて神の天使の中で最高の地位にあった偉大な頭脳の持ち主が、六千年の間、欺瞞と滅びの働きに全力をかたむけてきた。この長年の争闘の間に、サタンが身につけた腕前と狡猾さ、またその間にますますひどくなった残虐さの、あらんかぎりをつくして、彼は最後の争闘において神の民に迫るのである。この危機の時に当たって、キリストに従う者たちは、主の再臨の警告を世に伝えねばならない。そして民は、キリストがおいでになる時、「しみもなく」彼の前に立つことができるように、備えをしなければならない（ペテロ第二・3:14）。今日、神の恵みと力が特別にさずけられることは、使徒時代に劣らず必要なのである」（大争闘序）。

サタンの狡猾な欺瞞から神の民を守り、最後の戦いにおいてサタンの策略を見破り勝利させるのは、確かな天声、預言の霊によってである。

証の書、特にキリストとサタンとの「大争闘」に対するサタンの憎しみ

「証の書に対するサタン的な憎しみの火が燃え上がるであろう。…神のみ霊の警告と譴責と勧告が留意されるならば、サタンは欺瞞を持ち込むすべを知らず、欺きの中に魂を閉じこめることはできないことを知っている」（1SM84）。
「この真理こそは、サタンの怒りと世俗を愛する教会の敵意をひきおこ」すものである」（大争闘序）。

「本書の目的は、過去の争闘に関する新しい事実を提示することよりも、むしろ未来の諸事件に関する事実と原則とを明らかにすることにある。しかし、こうした過去のすべての記録を、光と暗黒との間の争闘の一部分として見るとき、そこには新しい意義が認められるのである。そして、これらの諸事件は、未来に光を投げ、過去の改革者たちのように、神の召しを受けて、この世のすべての幸福を犠牲にしても「神の言葉とイエス・キリストの証のために」立つ人々の道を、照らすのである。
　真理と誤謬との間の大争闘の模様を解明すること、サタンの策略を明らかにし、これに抵抗して勝利する方法を示すこと、神は正義と慈愛をもって被造物を取り扱われるということが明らかになるよう、罪の起源とその最終的処置に関して光を投げかけつつ、悪という大問題に満足のゆく解決を与えること、そして神の律法が聖

であって不変のものであることを明示すること、これらが本書の目的である」(大争闘序)。

サタンが最も恐れているのはその「策略が暴露されること」である。まさに、これは史上最後の危機の時に与えられた確かな「天声」である。よき羊飼いの声である。

「大争闘」配布の重要性

預言者、E. G. ホワイトは、「大争闘」の本について次のように言っている:

「わたしは、わたしが書いた他のどの本よりも、この本が配布されることを切望する。なぜなら、大争闘の中には、他のどの本よりも、世界に対する最後のメッセージがより明瞭に書かれているからである」手紙281,195。

預言者はこれを「銀や金のように大事にしている」と言われ、「秋の木の葉のように散らしなさい」と言われた。この時が来たのではないだろうか。現代の霊的イスラエルは、立ちはだかる巨大な世界的組織の前でもおじ恐れず、巨人ゴリアテの前に立った少年ダビデのように主の名によって戦えるだろうか。バチカンから流されている「愛と一致」に汚染されてはならない。

「大争闘を伝道地からしめ出すようなことをする人は、さばきの日に答えなければならない」(Manuscript 64,1894)。

「この本にある光は天から来たのである。人々が必要としている警告がもられているその本に対してわずかな信仰と信頼しか示さない人々は、神の前にどう申し訳をするのだろうか」(1888年 1280)。

「主からの警告と教えがもられているその本(大争闘)が2年近くも我が出版所に眠っていて、だれも人々に配る必要と重要性を感じなかった。兄弟方、わたしはあなた方がその重荷を負ってくれるのをいつまで待たなければならないのか」(B.L,1890年)。

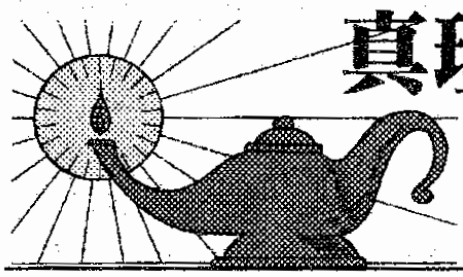
「これら(大争闘シリーズ)は売れないと言われているがそれは真実ではない。この販売に人間の方策が邪魔していると主が私に教えられたので、その事を知っているのである。これらの本は人間によって書かれたものであることは否めない。しかし、それは人々に語りかける神の声であり、他の本にはない影響を心に及ぼすものである」(MS 23-1890)。

「この本(大争闘)の配布の結果は、今見られることによって評価されてはならない。…しかし、これを読む者の多くは、その中に予告されたことが起こるのを見るまでは、自分たちの立場を明らかにしないであろう。…最後の働きにおいて地上が主の栄光で照らされるとき、多くの魂が神の戒めに従うであろう」

(Colporter Ministry 128-129)。

預言の民として、預言者が特に勧めた「大争闘」を自分自身で熟読し、他にも伝えたいものである。

金城 重博



真理の宝石

池宮城 義浩

◆　恵み深い神は人間が罪に勝利することをお望みになります。そして唯一の模範と慰めに満ちた約束をお与えになりました。

キリストの実物教訓　p294
「サタンは、人間が神の戒めに従うことは不可能であると主張した。事実、自分の力ではわたしたちは戒めに従うことは不可能である。しかし、キリストは人間の形をとってこられて、人性に神性が結合するときに人は神の戒めのあらゆる点に従いうることを、その完全な従順によって立証なさった。」

キリストの実物教訓　p296
「神の愛は罪を容認するものではない。神はサタンの罪を容認されなかった。またアダムやカインの罪をも許されなかった。神はわたしたちの罪を黙認したり、品性の欠陥を看過したりなさらない。神はわたしたちに、そのみ名によって勝利することを期待されるのである。」

◆　わたしたちが神の恵みと助けによって、罪に勝利することができるということを信じて求めないかぎり勝者になることはできません。

キリストの実物教訓　p305－306
「わたしは、自分の品性の欠点を正すことはできない、などとだれも言ってはならない。そう思い込んでしまえば、決して永遠の生命を受けることはできない。不可能であるということは、自分の心の中で、そう思ってしまうからである。勝とうと思わなければ、勝つことはできない。心が清めを受けずに汚れていることと、神の支配に喜んで従わないことからほんとうに困難なことが生じるのである。」

各時代の大争闘下巻　p223
「…それだから、だれでも、自分たちの欠陥は不治のものであると思ってはならない。神は、それらに打ち勝つ信仰と恵みをお与えになるのである。」

◆　素直さとまじめな思いをもって神により頼む者は、神からの助けをいただくことができます。

各時代の大争闘下巻　p276
「サタンは、キリストのうちに住んでいるどんなに弱い魂でさえも、暗黒の軍勢よりはるかに強力であることをよく知っている。…へりくだった心で神によりたのみ、神のすべての戒めに服従するものだけが安全なのである。祈りを怠っては、一日一時間たりとも安全ではない。特にわれわれは神のみ言葉を理解する知恵を祈り求めなければならない。聖書の中に、サタンの策略が示されている。またそれに対抗する手段も教えられている。サタンは巧みに聖書を引用し、彼自身の解釈をほどこして、われわれをつまずかせようとする。われわれは、謙遜な態度で聖書を学び、どんな場合にも神に依存していることを忘れてはならない。こうして常にサタンの策略に注意する一方、たえず、「わたしを試みに会わせないで…下さい」と信仰を持って祈らなければならない。」

各時代の大争闘下巻　p365-366
「聖書の言葉は、象徴や比喩が用いられていないかぎり、その明瞭な意味に従って解釈されるべきである。キリストは「神のみこころを行おうと思うものであれば、だれでも、わたしの語っているこの教えが…わかるであろう」と約束された(ヨハネ7:17)。もし人々が、聖書をその書かれてあるとおりに受け取りさえすれば、もし人々を誤らせ、その心を混乱させるような偽教師がいないならば、現在誤謬の中に迷っている幾千もの人々をキリストの囲いの中に導き、天使たちを喜ばせるような働きが成し遂げられるであろう。…幼子のような従順と服従とが、学ぶ者の精神であることを忘れてはならない。…祈りのうちに神により頼む思いと、みこころを知りたいというまじめな願いをもってなすべきである。」

国と指導者下巻　p98
「神がダニエルとその仲間たちに働きかけて、「その願いを起させ、かつ実現に至らせ」ておられたとき、彼らは自分の救いの達成に努めていた(ピリピ2:13)。ここに協力という神の原則の成果が示されていて、これがなくては真の成功を達成することはできない。人間の努力は、神の力がなければ何の役にも立たないのである。神の恵みをわれわれのものにするためには、われわれのなすべき分を果たさなければならない。神の恵みはわれわれのうちに働いて、願いを起こさせ、実現に至らせるのであるが、われわれの努力の代わりに与えられることは決してないのである。
主はダニエルとその仲間たちに協力なさったように、主のみこころを行おうと努力するすべてのものと協力なさるのである。そして彼は、彼らに霊を与えて、すべての真の動機とすべての気高い決意を強化なさるのである。服従の道を歩

むものは、多くの困難に出会うのである。強く陰険な勢力が、彼らを世に結びつけることであろう。しかし主は、彼の選民たちを敗北させようとするあらゆる努力を無に帰すことがおできである。彼らの主の力に頼ってすべての誘惑に打ち勝ち、すべての困難を征服することができるのである。」

国と指導者下巻　p100
「ヘブルの勇者たちは、われわれと同じ情の人々であった。それにもかかわらず、バビロンの宮廷の魅惑的影響下にありながら、無限の力に頼ったために、堅く立つことができた。異教の国家は、彼らが、神のいつくしみと恵み深さ、そしてキリストの愛を実証したのを見たのである。そして彼らの経験は、原則が誘惑に、純潔が堕落に、献身と忠誠が無神主義と偶像礼拝とに勝利したことの実例となった。」

◆　わたしたちは前の雨によって自分で知っている罪に勝利しなければなりません。そして後の雨の時に罪の根もろとも完全にきよめられます。

国と指導者下巻　p97
「ダニエルと彼の仲間たち…は信仰を持って知恵が与えられることを祈り求め、彼らの祈りを実践したのである。彼らは、神の祝福にあずかることができる状態にその身をおいていた。彼らは彼らの能力を弱めるものを避けた。そしてあらゆる方面の学問の理解を深める機会はすべて活用した。彼らは知力を与えずにはおかない生命の法則に従った。彼らはただ一つの目的、すなわち神の栄光をあらわすことのために、知識を得ようとしたのである。」

教役者への証 p506.
「先の雨がその働きをしないならば、後の雨は完全の実を熟させることはできない。」

大争闘下巻 p141
「天の聖所におけるキリストのとりなしがやむとき地上に住んでいる人々は、聖なる神の前で、仲保者なしに立たなければならない。彼らの着物は汚れがなく、彼らの品性は、血をそそがれて罪から清まっていなければならない。キリストの恵みと、彼ら自身の熱心な努力とによって、彼らは悪との戦いの勝利者とならなければならない。天で調査審判が行なわれ、悔い改めた罪人の罪が聖所から除かれているその間に、地上の神の民の間では、清めの特別な働き、すなわち罪の除去が行なわれなければならない。この働きは、黙示録一四章の使命の中にさらに明瞭に示されている。

この働きが成し遂げられると、キリストの弟子たちは、主の再臨を迎える準備ができるのである。「その時ユダとエルサレムとのささげ物は、昔の日のように、また先の年のように主に喜ばれる」（マラキ書3:4）。その時、主が再臨されてご自分のもとに受け入れられる教会は、「しみも、しわも、そのたぐいのものがいっさいなく、‥‥栄光の姿の教会」である（エペソ五ノ二七）。また、その教会は、「しののめのように見え、月のように美しく、太陽のように輝き、恐るべき事、旗を立てた軍勢のような者」である（雅歌6:10）。」

無力さの原因

神は、み言葉の真理の中で、ご自身についての啓示を人間にお与えになった。そして、真理を受け入れるすべての者にとって、真理は、サタンの欺瞞から彼らを守るたてである。今日、宗教界に広く行きわたっている害悪に戸を開いたものは、これらの真理の軽視である。神の律法の性質と重要性が、ほとんど見失われている。神の律法の性格、永続性、義務についての誤った観念が、改心と清めについての誤りをひき起こし、その結果教会内の敬虔さの標準を低下させるに至っている。ここに、今日のリバイバルにおいて神の霊と力が欠けている理由を見いだすのである。

さまざまな教派の信仰深い人々が、この事実を認めて嘆いている。エドワード・A・パーク教授は、現代の宗教的危機を指摘して、次のように言っている。「危険の原因の一つは、説教壇から神の律法を強く主張しないことにある。かつては説教壇は、良心の声が響くところであった。‥‥われわれの最も著名な説教者たちは、主の模範にならって、律法の戒めと警告とを強調することによって、彼らの説教を驚くほど威厳のあるものにした。彼らは、律法は神の完全の写しであって、律法を愛さない者は福音を愛していないという、二大真理をくり返した。なぜなら律法は、福音と同様に、神の真の品性を反映する鏡だからである。この危険は、さらに次へと発展して、罪の害悪とその範囲、その恐ろしさなどを過小評価させるに至る。戒めが義であればあるほど、それに服従しないことははなはだしい悪なのである。‥‥

上述の危険と密接に関係しているのが、神の義を軽視する危険である。現代の説教の傾向は、神の義を神の慈愛から引き離して、慈愛を原則として高めるよりむしろ一つの感情に低下させている。**新たな神学**は、神が結合されたものを分裂させた。神の律法は善か悪か。善である。それならば正義は善である。なぜなら、正義は律法を実施するものだからである。人間は、神の律法と正義を軽視し、人間の不服従の程度と恐ろしさを軽視する習慣から、罪の贖いのために備えられた恵みを過小評価する習慣に陥りやすい。」こうして人々は、福音の価値と重要性を忘れ、そしてまもなく、実質的に聖書そのものを放棄するようになる。(大争闘下 191-192)。

アンカーの目的

我々は次のことを信じてアンカーを出版している:

1．我々セブンスデー・アドベンチストの働きと使命は三天使の使命である(6T384, 2SM142)。

2．三天使の使命は、人々を来るべき事件、再臨に特別な備えをさせるものである(大争闘下 396-397, 140, 9T98)。

3．三天使の使命は、人々の心を天の至聖所に向ける。そこにおいて信者は最後の、特別な贖いを受ける(初代文集 414, 415, 417)。

4．我々は神のもくろまれたこの特別な祝福、特別な経験を拒み続けてきた。特に1888年以来(RH 8-26, 1890)。

5．ダニエル 8:14 の聖句は再臨信仰の土台、大黒柱であり、み業完成はこの聖句の正しい理解にかかっている(生き残る人々 422, EV 221, 5T 575)。

6．E. G. ホワイトは聖書の預言者と同等の霊感を受けた現代の預言者である。預言の霊は、我々を再臨に備える特別な賜物である(1SM 36)。

7．迫り来る未曾有の嵐に押し流されないために、アンカーは、三重の使命、聖所、安息日、人の性質、イエスの証(預言の霊)、ダニエル、黙示録の終末の預言に焦点をあてる(初代文集 417, 1T300)。

8．アンカーは、錨であり、最終走者の意味がある。この世代は福音の働きが我々の中に完成されないでは、我々の外のみ業完成はあり得ない。我々の不信仰によってみ業完成が遅れ、キリストの十字架の苦しみは今も続いている(大争闘下 182, 教育 328)。信仰による義認の体験によって、再臨を早める事をキリストは待っておられる。

9．我々は、キリストによって、キリストのために造られたのだから、キリストのために救われ、完全になり、天国に行かなければならない(イザヤ 43:7, コロサイ 1:16)。救いの動機を自己中心的な考えからキリスト中心に代える必要がある。「生きるも死ぬるも主のため」でなければならない。

10．セブンスデー・アドベンチストは、この地上の預言された最後の教会である(黙示録 12:17, 14:12)。教会は背教するように見えても、分離してはならない。それは日曜休業令のテストで天使がする働きである(2SM 69)。セブンスデー・アドベンチストが純潔な、完全な教会とされる時が近づいている(大争闘下 378、1440, 141)。

ビデオ

● **「アルプスのイスラエル」**
LLT プロダクション制作―日本語版　3,000 円
幾千年にもわたる苦難の中に信仰を守り通したワルデンセル教徒の驚くべき物語。

● **「獣のしるし―６６６」**　3,000 円
キリスト教と異教を結合させたローマ・カトリックの徹底研究

● **「どの聖書?」**　3,000 円
「混ざりもののない聖書」がワルデンセス、宗教改革者、再臨運動に受けつがれてきた歴史。

書籍

● 「警告」縮小要約版　マリアン・ベリー著　500 円
● 「警告」大、ダニエル１２章解説書
マリアン・ベリー著　1,600 円
● 「現代の真理」
完全への道―キリストの性質、聖所の清めを探る
至聖所に輝く十字架、終末事件　1,500 円
● 「そしてそれから」―なぜイエスは待っておられるか。
ハーバード・ダグラス　在庫あります。　1,700 円
● 「隠された戦い」　デビッド・ミラー　1,000 円
● 「預言の謎と新世界秩序」デビッド・ミラー　830 円

この印刷物は信徒の祈りと自由献金によって続けられています。
送金には郵便振替をご利用ください。
振替口座番号
０２０８０―０―１２１２１　サンライズ・ミニストリー
住所：〒905-0428　沖縄県今帰仁村今泊１４７１
サンライズ・ミニストリー出版部
電話：　０９８０－５６－２７８３
ＦＡＸ：０９０－５６－２８８２
Email : anchor@cosmos.ne.jp